

時評

マルタ百年

ならおか
奈良岡 聰智

(京都大学大学院法学研究科教授)

昨年末に地中海の島国マルタを訪問した。地図を見ると、長靴のような形をしたイタリア半島の左下に、蹴飛ばされた石のようなシチリア島がある。同島の左下に、まるで弾かれた小石か砂のようにポツンと存在しているのが、マルタ島である。人口約40万人、面積は東京23区の約半分というミニ国家だが、れっきとしたEU加盟国で、ヨーロッパを代表するリゾート地である。英語が公用語の一つであるため、近年は英語学習のための留学先としても人気がある。

マルタ島は有史以来、地中海貿易の中継地点として栄えてきた。キリスト教世界とイスラム世界の境界線に位置しており、主はローマ人、アラブ人、ノルマン人、スペイン、マルタ騎士団と次々と変わった。公用語の一つであるマルタ語が、アラビア語とロマンズ語(イタリア語などラテン語から派生した諸言語の総称)の混雑であるのは、そうした複雑な歴史の所産である。19世紀のナポレオン戦争後にイギリス領となったが、1964年に独立し、マルタ共和国となった。1989年には、アメリカのブッシュ大統領とソ連のゴルバチョフ共産党書記長が、冷戦終結を決定づけた歴史的会談を同島で行っている。この島の歴史を辿ると、ヨーロッパ国際政治の大きな流れが見えてくる。

実はマルタは、日本とも浅からぬ因縁を持っている。1914年7月、第一次世界大戦が勃発すると、日本は翌月に同盟国イギリスの側に立つて参戦した。イギリス、フランスなどの連合国は、強国ドイツに対抗するため、再三にわたって日本に軍事支援を要請した。日本は、中国や南太平洋のドイツ領を攻撃・占領したものの、陸海軍をヨーロッパに派遣することには消極的であった。しかし、大戦が長期化し、連合国側からの要請が続いたため、日本はついに重い腰を上げた。日本政府は、1917年2月以降に総計18隻の駆逐艦を地中海に派遣し、連合国側の艦船の護衛任務に当たらせた。その艦隊が拠点としたのが、マルタであった。



日本艦隊は、規模こそ大きくないものの、連合国側の勝利に少なからぬ貢献を行った。とりわけ、連合国軍の兵員70万人をアフリカからヨーロッパに無事輸送させたことは、高く評価された。しかし、この任務に伴って犠牲も生じた。1917年6月には、駆逐艦榊がオーストリア・ハンガリー海軍の潜水艦から雷撃を受けて大破し、艦長以下59名が戦死している。その他の犠牲も合わせ、大戦中の地中海で合計78名の日本人が命を落としている。彼らはマルタ島内にあるイギリス海軍墓地に葬られ、今も眠っている。今回の訪問では、この墓地の調査を行った。今では訪れる人も少ないというが、周囲の墓と同様に、綺麗に整備されていたのが印象的であった。

マルタには、昭和天皇も訪問している。昭和天皇は、皇太子時代の1921年にヨーロッパ各国を歴訪しているが、その往路でマルタに立ち寄り、日本人墓地にも詣でているのである。近年公開された『昭和天皇実録』によれば、皇太子が墓地を訪れたのは4月25日のことであった。皇太子はイギリス陸海軍からの奉迎を受けた後、日本人戦没者の追悼式に参列し、墓前に花環を供え、黙祷と拝礼を行ったという。その後、イギリスのマルタ総督別邸で行われた園遊会に出席し、約500名が来会した。皇太子は庭内に記念の植樹を行ったが、残念ながらその木は現在では残されていないかった。

第一次世界大戦は、日本ではほとんど「忘れられた戦争」となっており、マルタを拠点に日本海軍が活躍したことも、ほとんど知られていない。しかし、近年の研究によって明らかにされているように、この戦争が日本に及ぼした影響は決して小さくはない。日本が行った史上初のヨーロッパ派兵も、戦後に日本が「五大国」の一員として認められ、国際連盟の常任理事国となる上で、重要な一ステップであったと考えられる。派兵百年(2017年)を前に、大戦と日本の関わりの深さを再認識させられたマルタ訪問であった。

現在マルタには日本の領事館は設置されていないが、日本人の観光客や留学生は増加傾向だと聞く。昨年は国交樹立50年を機に、外務省高官(政務官)が初めてマルタを公式訪問した。メモリアル・イアーを機に、両国の関係が深まることを期待したい。